

## 沖縄作戦に於ける独立混成第44旅団史実資料

昭和22年3月25日  
第32軍残務整理部

### 独立混成第44旅団戦闘経過の概要

#### 1 作戦準備期間行動の概要

自昭和19年5月 至昭和20年3月

旅団は沖縄守備部隊となり首里付近にありたるも「サイパン」失陥に続く中部太平洋方面の情況に鑑み、7月初旬第9師団、次で24師団の沖縄本島増強により嘉手納地区に移動し、更に8月初旬62師団の到着と共に名護付近に移動し国頭支隊となる。

敵「レイテ」上陸より比島方面の情勢緊迫化に伴い本島より第9師団を南方に転用せらるるに決し、之に関連して旅団主力は、12月1日中頭地区に転じ中頭守備部隊となる。

昭和20年2月1日敵の本島に対する策動激化と共に軍作戦方針決定され、4度島尻に転じ知念半島を確保すると共に北正面よりする敵の攻撃に対しては軍の予備として随時出動し得る如く待機せしめらる。

旅団は渡川正面よりする敵の主上陸に対して強固なる障地を構築すると共に中城湾及び知念半島方面よりする一部の敵の上陸に対しては之を水際で撃滅する如く準備す。

戦闘開始前に於ける旅団の編成左の如し

独立混成第44旅団長 少将 鈴木繁二

隷下部隊 旅団司令部

独立混成第15連隊 長 大佐 美田千賀蔵

第2歩兵隊第3大隊	長	大尉	尾崎源一
旅団砲兵隊	長	大尉	原 秀雄
旅団工兵隊	長	大尉	村本福次
指揮下部隊			
野戦重砲兵第7連隊	長	大佐	樋口良彦
船舶工兵第23連隊	長	少佐	大島
独立速射砲第7大隊	長	少佐	中島好生
独立第2大隊	長		
独立第3大隊	長		
独立第29大隊	長	大尉	中本
海軍第 砲台	長		
電信第36連隊3号無線第一分隊			

## 2 北正面転進迄の戦闘経過の概要

自3月23日 至4月25日

敵機動部隊は昭和20年3月23日朝来大挙空襲し、次いで24日午前9時頃より澁川及び知念半島に対し最初の艦砲射撃を実施せり、其の主射向は澁川、志堅原、カチャ原、知念岬付近なるも射撃速度比較的緩慢なり。

3月25日より連日爆撃及び艦砲射撃を受け27日、28日両日に亘り0700頃より澁川正面に対し露骨なる上陸企図を示せるも旅団は満を持して放たず敵戒裡に待機す。

敵は3月25日慶良間列島に上陸し、次いで3月31日前島及び神山島に上陸せり。

4月1日 遂に敵は北谷方面より中飛行場正面に対し上陸を開始し其の兵力3~4ヶ師団なるものの如し。

旅団は依然知念半島を確保すると共に敵の澁川正面に対する上陸に対しては軍砲兵の絶大なる支援射撃及び第24師団との緊密なる協力の下に之を上陸地点に於いて撃砕すべく満々たる自信を

有しありたり。

4月4日 敵は北正面、東西両海岸道より逐次南下し、我が第62師団主陣地帯と接触するに至る。

軍は4月7日を期し攻勢に転ずべく内示せらる、旅団は転進計画の内達、幸地付近の司令部予定位置の偵察等夫々準備する所ありたるも澁川正面に対する敵の上陸企図益々露骨にして猛烈なる艦砲射撃の掩護下早朝上陸用舟艇に依り煙幕を構成しつつ奥武島付近迄近接する等敵の上陸の兆濃化せり。

独立歩兵第273大隊を配属せられ目取間付近に位置せしむ、旅団は東海岸道より与那原方面に南下する敵に対しては第2歩兵隊第3大隊（以下尾崎大隊と称す）を以て兩乞陣地に拠り之を全兵力（独混15連隊の2ヶ大隊、独立大隊3ヶ大隊、独立歩兵1ヶ大隊、旅団砲兵隊、旅団工兵隊）を以て軍砲兵隊及び第24師団と密接なる協力の下に強力且つ弾力性ある夜襲に依り敵を上陸地点に於いて撃滅する如く計画せり。

4月6日0230 約2～300の敵は津堅島に上陸せり、津堅守備隊（重砲第7連隊の1ヶ中隊独混15連隊の歩兵1ヶ小隊）は拂曉之を撃退せり。

4月7日 軍攻勢命令は中止せられ北正面の状況に鑑み歩兵第273大隊は原所屬に復帰せしめらる。

4月10日0730 津堅島に約5～600の敵上陸せり。

4月12日 船舶工兵第23連隊より曹長の指揮する2組の挺身斬込隊を海上より津瀬付近の敵重迫撃砲陣地を求めて奇襲せしめ成功す。

津堅島に対する奇襲は舟艇撃沈せられ不成功に終れり。

津堅島よりの通信途絶す、全員斬り込を敢行せるによる。

4月13日 津堅島の敵を撃退す、津堅砲台（野砲1、12連加2）は既に自爆せしめたるを以て旅団は負傷者を收容すると共に残存兵力を勝連半島に上陸せしめ敵の後方攪乱に任せしむ。

4月18日 敵は知名岬砲台付近の断崖を艦砲及び空爆に依り

破壊し虎視眈々たり。

4月19日 敵は朝来総攻撃に転じたるも、我の反撃により4月23日頓座す。

4月24日 第24師団主力は北正面に向かい機動を開始し、旅団は在小祿海軍部隊と協力し島尻を確保し軍主力をして後顧の憂無からしむることとなる。

4月25日 独混第15連隊第1大隊（野崎大隊と称す）独立第3大隊は第62師団の指揮に入り夫々天久及び国場に向かい前進す。

### 3 北正面戦闘加入より5月4日攻勢迄の概要

自4月26日 至5月5日

4月26日 旅団は尾崎大隊（独立速射砲第7大隊属）を現在地（兩乞障地、西原、稲嶺障地）に於いて第24師団長の指揮に入らしむると共に重砲兵第7連隊、船舶工兵第23連隊、独立第29大隊より成る知念支隊に現任務を引継ぎ、首里（含まず）以西地区の守備を担任することと決し旅団司令部を識名に前進す。

旅団は独混第15連隊を右地区隊とし連隊本部を松川に、新に指揮に入れる平賀部隊を左地区隊に（本部壺屋町）、船舶工兵第26連隊（本部長堂）を南地区隊とし旅団砲兵隊は国場、旅団工兵隊は識名に向かい夫々機動を開始せしむ。独立速射砲第7大隊（1中隊欠）は右地区隊長の指揮に入らしむ。

先に第24師団長の指揮に入れる野崎大隊は独混第15連隊長の隷下に復し独立第3大隊は国場に於いて再び隷下に入り旅団直轄となる。

4月27日迄に概ね右配置を完了す。

4月29日 軍は5月4日を期し総攻撃に転ずることと決す。

5月1日 旅団は首里以西与那原街道以南凹地に集結すること

となり旅団司令部は軍及び隣接兵団と密接なる連絡を保持する為首里軍司令部洞窟内に前進す、茲に於いて軍司令部、第24師団司令部及び旅団司令部は同一箇所に開設せられたり、船舶工兵第26連隊は指揮下を脱し其の主力を以て中頭方面に海上挺進せしめらる、平賀部隊及び独立第3大隊は第62師団長の指揮下に入る、尾崎大隊は再び隷下に復帰し弁ヶ嶽西南側凹地に集結を命ず

旅団主力は大名南側凹地に旅団砲兵の主力は首里城跡に機動を開始し5月3日拂曉迄に配置を完了す。

5月3日 総攻撃命令下達せられ千載一遇の勇士の誉と意気大いに挙る。

旅団は明4日を期し独立混成第15連隊を以て翁長、幸地の線より大山に向かい突進すべく決し旅団司令部を幸地西南方2Km四叉路丘陵地帯に推進することとなり旅団通信の主力及び指揮班の一部先発す。

5月4日未明、独混第15連隊は攻撃前進す。

旅団司令部予定地は第一線部隊により占められ戦況は其の前進不適當にして依然首里に在ることに決す。此の日我が空軍の地上戦闘に直接協力するを全員待望しありしも遂に其の英姿を見ず。

京僧参謀は伝令1を率い自ら第一線部隊の状況を視察し幸地付近に迄進出、敵の狙撃を受けつつ夕刻復帰し有力なる状況判断を進言する所ありたり。

#### 4 総攻撃中止より島尻転進迄の概要

自5月 5日至5月31日

5月5日 軍は攻撃を続行せしが急激に其の戦力を損耗しひいては敵の本土決戦を促進するを以て再び持久するに決した、夕刻攻撃を中止し態勢を整理せしめらる。

旅団は軍の左第一線となり首里（含まず）以西地区の防備に任

ず、平賀部隊（那覇）、独立第一大隊（天久）は指揮下に入り、尾崎大隊は第62師団長の指揮下に入り潭越に向かい前進す、旅団は独混第15連隊（本部松川）を以て右地区隊となし、第62師団と連携し末吉、真嘉比、安里を堅固に陣地占領せしめ平賀部隊（本部壺屋町）を以て左地区隊となし安謝、天久よりする敵の突破に備え那覇沿岸よりする敵の上陸を封殺せしむ、独立速射砲第7大隊は右地区隊長の指揮に入れ、旅団砲兵の主力は中栄間旅団工兵の一部を以て右地区隊に協力せしめ其の主力を識名に配置す。

旅団は患者の収容所を識名に開設し又防衛招集者を以て編成せる輜重隊の全力を以て物資集積所たる島尻郡糸数より弾薬、糧秣の輸送に任せしむ。

5月7日朝迄に概ね新配備を完了す。

5月8日 内間を奪取せられ敵は安謝川の渡河準備を開始す。

風部隊（航空保安通信警備中隊）独立高射砲第68大隊は松川に於いて旅団の指揮下に入る。

5月12日 旅団当面の敵は海兵第6師団にして安謝川を突破し天久台地の独立第3大隊は甚大なる損害を受く。

5月12日 終日天久西方台一崇元寺一安里北方52高地一真嘉比西北無名高地附近を確保し敵の浸透を阻止す、海軍丸山大隊及び田口大隊は旅団の指揮下に入り丸山大隊は繁田川に於いて旅団直轄となり田口大隊は右地区隊長の指揮下に入らしむ、旅団工兵の主力を松川南方台地に配置す。

5月15日以後敵の高圧は依然天久より那覇市北側に指向せられ、独立第2大隊は20日頃壊滅す、海軍伊藤大隊及び迫撃砲小隊を指揮に入らしめられ左右両地区隊の接撃部に投入す。

連日挺身斬り込反撃、夜襲を強行し敵に出血を強要するも我亦第一線兵力の損耗累増す、特に安里北方52高地の争奪は凄惨を極め野崎大隊長は自ら台上に立ち軽機銃の腰射射撃により敵に甚大なる損害を与えて之れを撃退し其の争奪数日に及べり。

此の頃第一線の手榴弾、迫撃砲弾等弾薬糧秣の欠乏甚だしく独立輸送大隊2ヶ大隊（船舶戦隊の改編されたもの）を配属せられたるも熾烈なる弾雨下、遠く糸敷（旅団物資集積所）小塚（海軍）より運搬補給するは特に夜間に限られ極めて困難なりき、敵は遑二無二那覇市北側に進出し、此の頃独混第15連隊第2大隊、海軍伊藤大隊壊滅す。

5月27日 平賀部隊は其の本部馬乗攻撃を受け無線連絡途絶す。

5月28日 軍は島尻南端に転進し飽く迄持久を策することに決し旅団は軍司令部の転進を掩護せしめらる、旅団司令部は識名に転進す。

旅団は海軍丸山大隊を繁田川、識名に残置し独混第15連隊の1大隊を国場南方台上第二線陣地に据らしめ主力の転進を掩護せしむると共に風部隊を新城に前進せしめ旅団主力の具志頭一安里一八重瀬岳155高地附近の展開を掩護せしむ。

5月31日夜半旅団長長堂に到り脱出せる平賀部隊長と会す。

## 5 島尻転進後の戦闘経過の概要

自6月 1日 至6月22日

6月1日 旅団司令部は予定の如く仲座西南方Km108高地に転進し旅団主力も亦6月3日拂崎迄に概ね新配置を完了す。

旅団は軍の右第一線となり独混第15連隊を右地区隊とし具志頭一安里北方台地に平賀部隊を左地区隊とし八重瀬岳155高地附近に、旅団砲兵隊は仲座69.4高地附近に配置す、独立速射砲第7大隊、旅団工兵隊は右地区隊長の、海軍丸山大隊は左地区隊長の指揮に入らしむ。

新に指揮下に入れる船舶団司令部及び隷下に復帰せる尾崎大隊は直轄として仲座に位置せしむ。

第一線主力は既に大なる損害を受けあり、即ち5月20日現在に於ける其の兵力左の如し、

旅団司令部	250	右地区隊	500	左地区隊	1,100
直轄	1,050	輸送隊	1,000		

右兵力は島尻転進迄に更に大なる損害を受け軍後方部隊の人員を補充せられたるも既に対戦車火砲、重火器、応用爆雷等殆ど皆無の状態にて旅団砲兵亦当初10榴8門(弾薬8,000発)の内3門(弾薬120発)を残存するに過ぎず。

- 6月5日 敵約200具志頭に進出せるも之を撃退す。
- 6月6日 臼砲2門弾薬数発を残しありたるも障地進入の際其の1門を破壊せられたり、臼砲連隊を指揮下に入らしめられ中地区隊となし第一線に投入す。
- 6月12日 頃左地区隊との連絡全く途絶す。
- 6月15日 中地区隊との連絡途絶す。
- 6月16日 仲座の旅団砲兵隊本部、戦車の火焰攻撃を受く。
- 6月16日 以降第62師団残存兵力を逐次投入せしめらるるも既に其の効なし。
- 6月17日 尾崎大隊本部戦車の火焰攻撃を受く108高地北正面一帯に戦車10数両進出し旅団司令部が戦車3両により攻撃を受く。

旅団長は残存兵力の総てを率い総突撃を決意せらるるも軍命令に基き摩文仁89台地(軍司令部位置)に転進することに決す。

6月19日拂曉先ず摩文仁一真栄平一仲座四叉路西南側台地上に転じ6月20日早朝摩文仁89台地南側海岸に転進す、転進の際先発人員は遂に掌握するに至らず司令部半減す。

6月22日 軍司令官及び参謀長自決せられ旅団長は予て軍司令官との決定に基き国頭に残置せる遊撃隊を指揮すべく決意せられ最後の訓示をなすと共に斬り込隊を編成し逐次国頭に集結すべ



く命じたる後司令部の編成を解かる。

## 感 状

独立混成第44旅団同配属部隊首里那覇附近の戦闘に於いて勇奮力闘敵海兵第6師団を殲滅したるを以て6月9日軍司令官より感状を授与せらる。

感状授与部隊左の如し

独立混成第44旅団司令部	独立高射砲第78大隊
独立混成第15連隊	風部隊
旅団砲兵隊	海軍田口大隊
旅団工兵隊	海軍丸山大隊
独立第1大隊	海軍伊藤大隊
独立速射砲第7大隊	

### 付録1 独立混成第44旅団編成の概要

旅団司令部は昭和19年5月第32軍担任にて沖縄に於いて編成、第1歩兵隊、第2歩兵隊、旅団砲兵隊、旅団工兵隊は第6師団管下に於いて昭和19年6月初旬編成せらる。

旅団主力は沖縄に向かう途次昭和19年6月29日0700輸送船富山丸は敵潜水艦の魚雷攻撃により撃沈され残存する者1/3に満たざるも残存者を以て仮編宇土部隊を編成す。

8月下旬補充人員到着と9月沖縄に於ける現地招集に依り第2歩兵隊、旅団工兵隊の編成完結す。独立混成第15連隊は富山丸遭難に依り7月初旬急遽空輸せられ本島到着と同時に旅団の指揮下に入り9月其の隷下に入らしめらる。

### 付録2 作戦上旅団に不利となりたる事項

- 1 付録1の如く旅団編成当初の事故は必然的に素質不良なる補充将兵により補はれ有形無形上大なる影響を蒙れり。
- 2 作戦経過の概要に示せる如く旅団は作戦準備期間に4度に及ぶ移動をなし然も島尻東半部に於いて嚴守存在は敵をして南方よりの策動を完封したるとは言え主戦闘を固有の陣地を捨て首里戦線に転戦したる結果、一年間の作戦準備は結果論的に言えば全く零に等しく尚兵団の移動頻繁の為物資輸送と陣地の構築に追われ新編部隊に拘らず訓練充分ならざるは大なる不利とす。
- 3 主戦闘に於いては真の隷属部隊は独立混成第15連隊(歩兵3ヶ大隊)、旅団砲兵隊、旅団工兵隊の3ヶ部隊にして他は全く素質不明なる臨時配属部隊なりしは大なる不利とす。
- 4 旅団司令部の編成通信弱小なるは大なる不利とす。  
即ち司令部固有の編成は旅団長1、高級部員1、副官1、部附1、通信班長1、主計1、軍医1にして通信は下士官5、兵20にして有線なし、右の編成は司令部の機能發揮に大なる不利を生ぜり。